

オン・ザ・ロード

text by Taku Miki
illustration by Pato Yanagihara

ぼくがはじめて東京へ行ったのは、下落合の叔母や練馬の叔父に会いに行くため、一九四七年のことだと思う。戦争が終ってまもない東京は、焼け野原がひろがっていて国会議事堂が遠くからも見えるありさまだった。東京は巨大なムラである。などという言葉がぴったり来る平坦がずっとひろがっていた。食糧事情もきびしかったと思う。持参した弁当を食べようとする、叔母がいった。「白米のおにぎりなら、仕立て直してみんなでいただくかない？」全部で三人分を九人分にひきのぼした炒飯に、トビウオの焼いたのを出してくれたが、少し欲求不満だった。叔母のご亭主は、食事の前に、神に感謝する言葉をのべた。キリスト教も終戦で自由になっていた。そんな感謝の儀式は、戦争が終ったんだ、ということをおぼためて思わせた。

作家 三木卓

東京 昨今

本格的に東京に住むようになったのは、東京の私立大学に合格したからである。まだ住宅事情は最悪で、ぼくは柿の木坂の母の友人の家の三畳の書生部屋を二千円（食事別）で借りた。大学を卒業してから妻と世帯をかまえたのは杉並区方南町である。おりから64年東京オリンピックの準備が進んでいて、ぼくらの住んでいるそばは環状7号線の建設中で、すごいものが出来るのだ、と思った。学生時代も、卒業してからも、飲んだくれる夜が多かった。新宿などは、そこにゴロン、と町につつまれながらころがる楽しさがあった。しかしおつかないこともまた沢山あって、目を放すと所持

品がちまちまなくなった。

この町はどういうことになっていくだろう。環状七号や首都高は、すごい勢いで建設中である。もしかしたら、東京はこども雑誌で見た「不思議の国のブッチャー」の未来都市想像図に高速道路の交錯している風景を思い出し、未来都市はこうなるのか、と思った。

それから新幹線が東京―大阪を四時間一〇分で走るようになり、戦前の特急つばめなどの速さを思い出して、そんなことは本当かと思つた。現在はその半分の時間でいける。今思うとあの64年東京オリンピックのころ、急発展へのゴングが鳴ったのだろう。

ぼくは、人気作曲家いずみたくも沈潜していたといわれる方南町の長屋群の中に住んでいた。そのうち落選回数が三十回になったのであこがれの公団住宅に当選率一〇倍の威力で入居することが出来た。

それは江東区亀戸の二丁目団地で、下町に高層住宅をという政策から出来た高

層団地である。ニコニコしていた住人の顔を思い出す。団地もあのころは大人気で、入居が実に幸運だと感じようこびあつたことを思い出す。

人生の後半は大船、鎌倉ですごした。東京での仕事を終えて、車などで都心からもどつて来るとき、しばしば戦後の東京の姿を思つた。この立派なビル、交通機関、道路は、正に未来都市予想と似ているイメージである。

現実にはあらわれたものとして、橋なども信じられない高い技術で、つくられている。橋脚の支えは地中深くの安定層にとどくようにうちこまれていく。橋脚の一本一本が、ちよつとしたビルの規模で、そこへコンクリートを流し込んでいたのを見て仰天した。本州と四国の橋にもおどろいた。土木工学はどんどん発展している。

それにしても、これが一九四七年の荒れ果てただだつぱろい土地と同じところなのか。ぼくはあやしみおどろく。そして今度はこれが現代の東京地区の姿で、もとの一九四七年の焼け野原なんかそもそもなかったんじゃないのか。ぼくの幻想ではないのか。車窓からレインボーブリッジをのぞんで、これが現実なんだろうが、なんだかかしこし夢の中にいるのかもしれない、とも思う。

みき たく／1935年生まれ。早稲田大学ロシア文学科卒業。出版社勤務を経て、文筆生活に入る。主な著作に詩集『わがキディ・ランド』他、小説に『鶯』、『野いばらの衣』（講談社文芸文庫）、『裸足と貝殻』（集英社文庫）他、評論に『北原白秋』（筑摩書房）他。